

グローバル社会に必要な英語力とその指導 —視察報告と指導改善の提案—

岡田 礼子*1

What is Required for Global Communication: Suggestions for the Classroom in Japanese Universities

by

Reiko OKADA*1

(received on Nov.22, 2014 & accepted on Dec.1, 2014)

Abstract

In order to discover what is required for Japanese students to be able to communicate in the global world, the author visited some multicultural cities and university classrooms in and outside of Japan. Two essential things observed were (1) the reality of English as an International Language (EIL) in the multicultural community, and (2) the significance of logical thinking and writing in university classrooms, neither of which had been realized by the author in spite of abundant information and knowledge gained years ago. Considering the limited amount of time for English lessons in Japanese universities, two suggestions are offered to help teachers and students meet the demand for English in today's world: (1) teachers and students in Japan need to shift their mindset on what the goal of English education in Asia should be and how to achieve it, and (2) more time should be spent on reading and writing in English while oral communication skill is learned through thinking activities. Some experimental activities are proposed for the future curriculum, and possibilities and difficulties of the activities are discussed.

Keywords: *Global communication, EIL, Writing, Thinking, Japanese university*

キーワード: グローバルコミュニケーション, 国際英語論, 英作文力, 論理的思考, 日本の大学

1. はじめに

21世紀に入り、急激な情報技術の発展によりあらゆる分野でグローバル化が進み、外国語教育を取り巻く環境も大きく変化した。2003年に「英語が使える日本人の育成のための行動計画」¹⁾が文部科学省から出され、大学卒業後に社会で英語が使える人材を育成することが求められるようになった。しかし、2013年の時点で、英語を使ってグローバル人材として活躍できる人材は、全く不足状態であると言われており、市村によると、毎年26万人が新たに必要であるということである²⁾。グローバル人材育成のための英語教育については、各大学での実践例が数多く報告されており、2013年の大学英語教育学会全国大会での特別企画では、約70の大学・学部のポスター発表があった³⁾。しかし、18歳人口の減少に伴い、多様な学生が入学するようになり、限られた学習環境での効果的な指導の開発に四苦八苦している様子が多く見られた。

筆者が所属する東海大学情報通信学部でも、学部開設以来、世界で活躍できる技術者の養成を目指し、少ない授業時間で効果的に学力を向上させる方法を研究し、また、どのようにして専門分野の教育につなげるべきかを模索してきた。しかし、2012年～2013年に卒業した第1期生と第2期生の卒業研究発表からは、多

くの課題が明らかになり、新たな考え方による教育プログラムの開発の必要性が確認された。

本稿では、まず情報通信学部でのこれまでの英語教育の取り組みを振り返る。次に、海外の多文化・多民族社会における英語使用の現場と国内外で先進的英語教育を行う大学の視察から得た知見を報告する。その後、日本の一般的な大学環境におけるグローバル人材育成のための英語教育に関わる意識転換と指導の改善について検討し、最後に、今後の情報通信学部における英語教育プログラムへの提案をする。

2. これまでの取り組みと問題

東海大学情報通信学部（1学年定員320名）は、グローバルに活躍できるエンジニアの育成を目指して2008年に開学し、英語教育については「英語で研究発表ができる人材を育成する」⁴⁾という大きな目標が掲げられた。しかし、学生の英語力は多様であり、全員が同じ到達点を目指すことは当初から難しいと思われた。

そこで個々の学生が、入学時の能力から段階を踏んで学力を伸張させる指導を基本とし、週2回の必修授業で、様々な個別のケアを行えるよう、以下の環境を整備した。①25名以下の少人数クラスを8レベル開講し、各担当教員がレベルに合わせた指導を行う。②学習内容をきちんと整理させ、学生カードを利用して各学生の学習状況を明らかにし、学生各

*1 高輪教養教育センター 教授
Liberal Arts Education Center, Takanawa Campus,
Professor

自に学習に責任を持たせる^{5) 6)}。③どのレベルに在籍しても、きちんと学習した学生が公平に評価される統一評価方法を用い、学習意欲を維持させる⁷⁾。

指導法は、上位レベルでは英語母語教員（ネイティブ・スピーカー教員）が日本語を介さずに授業を行い、間違いを気にせず英語をたくさん使うことにより、英語実践力の向上をめざした。下位レベルではネイティブ・スピーカーの教員と日本人教員がペアとなり、入学前の英語嫌いの感情を再び持たないように、高校とは異なる活動を多く取り入れ、意欲的に学習に向かわせるように指導した。そのため、文法や英作文などの旧来の大学英語での指導より、欧米式コミュニケーション重視の指導が多く実施された。

科目の配置は、1年次に「リスニング」「スピーキング」で英語音に慣らし積極的に話す習慣を作り、2年次に正確な文法理解を含む「リーディング」「ライティング」を指導するという全学統一カリキュラムに従った。（2012年以降全学カリキュラム改訂に伴い科目名称・開講時期が変更された。）

学部が掲げる「研究発表を英語のできる人材の育成」という目標には大変悩み、専門分野の英語への橋渡しができることを願って、理系英語の導入と口頭発表力の強化を行った。理系英語は、英語による数学ドリルや理系インターネット情報などを利用して週2回の必修授業のうちの1回を使って指導した⁸⁾。口頭発表力は、英語での発表に対する恐怖感を減らすために、様々な形態でのスピーチやプレゼンテーションをさせ、アイコンタクト、表情、姿勢、ジェスチャーなどの言語以外の表現方法の指導を豊富に行った⁹⁾。

このような1-2年次の必修英語の指導を通して、それぞれのレベルの学生が入学時の英語力から段階を踏んで学力を伸ばすことをめざした。しかし、その後の3-4年次の専門科目の学習で、どのように学習が積み重ねられ、力を伸ばすのかは不明であった。

第1期生、第2期生が卒業する2012年と2013年に、多くの学生が英語で卒業研究発表をすることを期待した。しかし残念ながら、英語で発表した学生はわずか数名でしかなかった。学部の教員からは、「流暢に話すように見えるが、中身のある英文が読めないし書けない。論文はおろか、短い英文すら正しく書けない。文法知識がないので指導のしようがない」という苦言を頂く有様であった。

3. 世界の多文化社会と先進的教育の視察

筆者は情報通信学部の1-2年次の必修英語プログラムを改善するにあたり、新たな発想が必要であると考え、特別研究休暇（2013年10月～2014年3月）を利用して、グローバル社会でのコミュニケーションの現場を体験し、国内外の授業を視察した。

視察した大学と参加した学会は次の通りである。
米国：University of Illinois at Chicago, DePaul University, Roosevelt University, Loyola University, Purdue University Calumet, Illinois Council on the Teaching of Foreign

Languages (ICTFL),
Illinois TESOL-Bilingual Education (ITBE)
中国：香港大学, 広東外語外貿大学,
TESOL Symposium in China
タイ：King Mongkut's Institute of Technology,
Chiang Mai University,
Education and Development Conference (EDC)
日本：国際基督教大学, 国際教養大学, 国際大学,
会津大学, 立命館大学情報理工学部
これらの視察・体験から得た知見を以下に報告する。

3.1 多文化社会における英語教育

(1) 米国シカゴ市の大学英語教育

シカゴ市は、人口の20.6%が外国生まれの住民であり¹⁰⁾、カリフォルニア州（27.1%）やニューヨーク州（22.6%）などと同様に移民が多い多文化コミュニティである¹¹⁾。移民にとって、英語力は将来の生活レベルが決定される重要な能力であるとされ、現在アメリカでは、英語が使えない移民の増加とその教育が大きな問題となっている¹²⁾。

視察したシカゴ地域の5大学は外国人向けの英語集中コースを開設しており、アメリカの大学への正規の入学をめざす外国人学生が1日3時間程度の授業を能力別クラスで受講していた。イリノイ大学英語集中コースのDian Highland主任によると、英語集中コースへの入学は、TOEFLなどのスコアと共に、英語の小論文を書かせて判断する。書いた英文を見ることで、実力がはっきりわかるからである。基本的な英作文力がなければ、いくらペラペラと話せても、大学への進学は不可能である。アメリカの大学での外国人向け英語指導の目的は、ネイティブ・スピーカーと対等に「議論」できる英語力を養うことであるため、下位レベルでは、文法をきちんと学習させて意見を述べるための基礎を習得させ、上位レベルでは、正確な英文で論理的に意見を伝えるフォーマルな作文力（アカデミック・ライティング）の習得を目的とする。これが大学の学習で最も必要とされる力であるからだ。英語集中コースでの学習は非常に厳しく、学力向上が見られない学生には退学や他大学への移籍を促すそうである。

意見を述べるために文法力が必要であることは、第二言語習得では当然のことであるにもかかわらず、なぜか日本では「コミュニケーション力＝聞く力・話す力」「文法より使える英語が必要」と考えられがちである¹³⁾。しかし、英語圏に住んでいても、文法学習が重要であること、また、英語コミュニケーションにおいては、論理的説明能力が絶対的に必要であることを改めて認識した。

(2) シカゴでの言語教育学会

ITBE（イリノイ・バイリンガル教育学会）では、アルバニア出身の高校英語教員 Gevek Anbarchian 氏の発表に深く考えさせられた。Anbarchian 氏は、移民の高校生向けの英語科目で、世界の様々な絵画から受けるメッセージを深く思考させ、論理的・批判

的論文を書かせることで、英語作文力と思考力を育成している事例を発表した¹⁴⁾。参加者から「この学習は一般のアメリカ人高校生にも難しい。難しすぎて生徒の学習意欲を失わせるのではないか。」などの意見が次々と出された。それに対し Anbarchian 氏は、自身の経験を踏まえ次のように述べた。

移民はネイティブ・スピーカーと対等かそれ以上のコミュニケーション力と思考力を習得しなければ、グローバル社会で職を得ることはできない。たとえ人種や宗教で差別を受けても、教育があれば生き残れる。移民にとっては“English is money”なのであり、それを理解した生徒は必死で学習する。諦めてしまう学習者には何を指導しても効果はないのだ。

参加者全員が一瞬言葉を失うほどの衝撃であった。グローバル社会で生き抜くための危機感が英語力の習得に大きく影響することを理解した。

ICTFL (イリノイ外国語教育学会) では、スペイン語を指導する際に、英語でのアカデミック・ライティングと同様な方法 (論題→第 1 主題→その支持文→第 2 主題→その支持文→結論) で書かせることの重要性を、豊富な実践例と共に示された¹⁵⁾。グローバル社会では、英語だけではなく、他の言語においても論理的に書くことが必要とされることを知った。

(3) アジアの国際都市香港

香港は世界のどの都市よりも多い 115 の領事館があり、アジアにおけるグローバル社会の最前線と言われる多文化都市である¹⁶⁾。住民が日常使っているのは中国語 (広東語) であるが、街で筆者が話しかけた人たちはみな、すぐに英語に切り替えてくれ、誰もが当たり前のように英語が使えるように思われた。しかし、街の至る所にある英語学校の広告を見て、お金を払って学習していることを理解した。

香港のパナエジュケーション (株) 社長の青田朱美氏によると、香港人にとって英語は利益を生むために必要な言語であり、英語で主張し説得できることが重要とされる。そのため、きれいな英語で話すことにはあまり関心がなく、強い中国訛りも気にしないということであった。アメリカの移民と同様に、香港でも“English is money”であると感じた。このことは、香港大学英語学部のシンガポール出身の教員 Lisa Lim 氏の“English as a global language in Asian contexts”の授業において、さらに明確に“New economy highlights languages as resources” (新経済では言語は資源・財源として重要なのである) と講義されており¹⁷⁾、アジアの人たちが持つ危機感を強く感じた。

興味深いのは、香港の最高学府である香港大学には、言語としての英語を教える授業がないということであった。香港大学副教授の中野嘉子氏によると、英語による授業を受講できる英語力を持っていることを前提に入学許可するため、英語の言語習得授業は不要なのだ。教員は世界中から高い基準で選ばれ (50%が外国籍で出身国は約 50 か国)、欧米式の教

育がすべて英語で行われ、学生は調べ、討論し、論文を書く、という形式で学習する。

また、自宅に勉強部屋がある学生はごく一部のため、学内に勉強したり討論したりする場所がたくさん用意されている (中野副教授のインタビューより)。学内のあちこちに、夜遅くまで勉強する学生が大勢いるのでとても驚いた。香港大学の学生で 1 年間京都大学に留学した経験がある Wendy Luk さんが、留学中のことをこのように話していた。「日本の学生と同じ授業をたくさん受講したが、勉強は楽で、あの 1 年間は本当にパラダイスだった。」いかに香港大学での勉強が厳しいものかが想像できた。

3.2 国内で先進的国際教育を行う大学

(1) 英語力と国際教養教育で成功している大学

国際基督教大学 (ICU) と秋田県立国際教養大学 (AIU) では、外国人留学生、バイリンガルの日本人学生、外国人教員などが非常に多く、国際的な雰囲気の中で徹底した欧米式の教育が行われていた。学生は、毎日英語で行われる能力別少人数クラスの授業を 2~3 科目受講し、「調べ・討論・論文・発表」の方法で学習する。

ICU では、初年度に高度な国際教養のオリジナル読解教材を全学生の指導に用い、critical thinking (論理的・批判的思考) をさせ、自分の意見を論理的に「書く」学習を徹底的に行っている¹⁸⁾。ICU のリベラルアーツ英語プログラム主任の岩田祐子教授によると、毎年 400 名以上の学生 (1 学年定員 600 名) が留学し、現地の学生に混じって専門科目を学び、単位を修得する¹⁹⁾。そのためには、しっかり思考して、アカデミックな英語で書ける能力が必要であるため、ライティングの授業には、Tutorial という時間を設け、全学生に個別指導を行っている。グローバル社会で世界の学生と対等に討論できる能力を、時間をかけて徹底的に指導していることがわかった。

AIU では、学習の評価が厳しく、英語プログラム主任の Patric Doughterty 教授によると、4 年間で卒業できる学生は約半数だそうである。そして、教室での学習のほかに 1 年生全員が留学生と相部屋で寮生活をする。これにより英語力を鍛えると共に、外国人との生活の中で起こる様々な問題解決能力を身につけさせるということだ。在学中に 1 年間の留学も義務付けられており、あらゆる方法で、グローバル社会を経験させて教育していることがわかった。

(2) アジア人コミュニティの中で教育する大学

新潟県魚沼市にある国際大学 (IUJ) は英語を公用語とする大学院大学で、途上国を中心に海外からの政府派遣留学生が多数を占める (在校生 327 名のうち日本人は 40 名)。留学生の出身国はインドネシア、タイ、スリランカ、ミャンマー、ウズベキスタン、アフガニスタン、フィリピン、モンゴル、ラオスなど、アジア諸国が圧倒的に多い²⁰⁾。

教室では、5 カ国以上の異なる国からの学生たち

10名ほどが席を並べ、それぞれが独特な訛りの英語で活発に討論しながら学んでいた。その環境は教室内だけに留まらない。魚沼駅から大学へのスクールバスの中では、強い訛りの英語で「君の国は大統領か、それとも首相か、兵役はあるか、」などの会話が飛び交い、英語を介してお互いに好奇心を持って学び合おうとする環境が日常的にあることがわかった。筆者も会話に興味を持ち、そばに座ってみたが、会話が深まるにつれ内容が複雑になりテンポも速くなり、話についていけなくなった。彼らの高い英語コミュニケーション力を目の当たりにした。

国際大学は、アジアのグローバル社会の縮図のように思われた。このような環境を、グローバル人材を目指す日本の学生には、ぜひ体験させるべきだと思った。本当は、学生より先に教員が体験するべき環境なのかもしれない。

3.3 国内の情報系学部での取組み

(1) 外国人教員の研究室と英語卒業論文

会津大学はコンピュータ理工学部（1学年定員240名）の単科大学である。教員の40%が外国籍の教員であり、3年次からは40%の学生が外国人教員の研究室に属し、日々の研究の中で英語を使う。また卒業時には、全学生が英文で論文を書くことが義務づけられている²¹⁾。

見学した1-2年次の必修英語の授業では、学生が積極的に英語を使おうとする様子はあまり見られなかった。しかし、3-4年次用の英語選択科目の履修者が非常に多いことに驚いた。学生に聞いてみると「外国人教員の研究室で日々英語を使うので、英語を勉強する必要性を強く感じる」「英語は苦手だが、卒業論文に向けて、勉強する必要があるため履修している」などと言っていた。

外国人教員の研究室での日常的な英語の必要性や、卒業論文を英語で書くという義務が、学生を主体的に英語学習に向かわせていると感じた。

(2) 特別プログラムを設置する情報系学部

立命館大学情報理工学部（1学年定員420名）では、筆者の勤務校と似通った悩み（学生間の学力差、下位レベルの学生指導、ネイティブ・スピーカー教員と日本人教員の配分、少ない英語授業など）があるようであった。しかし、その中で「みらい塾」というグローバル人材育成を目的とした特別プログラム²²⁾により、意欲的な学生を引き上げる取組みを始めていた。1年次に塾生を募集し、一般の英語授業以外に、「TOEIC集中講座」「科学技術英語講座」「グローバルキャリア育成セミナー」などを100名程度に受講させ、最終的にTOEIC600点以上を目指すものである。主体的に学習しようという意志がある学生を引っ張り上げるよい企画であると思った。

3.4 アジアの非英語圏での国際語としての英語

(1) TESOL Symposium in China

尾関によると、中国では英語専攻ではない大学生の卒業条件として英語統一試験が実施されており、学生の英語に対する意識は非常に高い。また小学校から豊富な教材を使用して学習者主体のタスク中心の英語教育が行われるため、英語運用力は日本の学生よりはるかに高く、北京や上海などの大学では国内にいながらネイティブ・スピーカー並みの運用力を習得しているという²³⁾。そのような背景を理解した上で、広州での中国英語教育学会に参加した。

本学会では、グローバル社会に対応した効果的英語教育をさらに進めるために、今までの英米の指導法ではなく、中国の文化を取り入れた新しい英語教育の必要性が主張された。特に興味を引かれたのは、南京大学 Wang Haixiao 教授の次の主張であった。中国人の思想や態度を否定するような欧米文化に偏った指導法では、すべての学生の力を引き出すことはできない。例えば、英文法を説明できないネイティブ・スピーカー教員には英文法をどのように中国人に説明すべきかを学習してもらう必要があるし、相手を尊重する気持ちを大事にする中国文化を理解せず、欧米風の自己主張ばかりを求める教員には中国文化を学習してもらうべきだ、というものであった²⁴⁾。

これは、MacKayらが主張する国際英語論（English as an International Language, EIL）²⁵⁾に基づく考え方であるが、中国と歴史的背景を共有する日本の英語教員として、大いに励まされ、日本の英語指導について考え直すよい機会となった。

(2) Education and Development Conference

タイのバンコクで開催されたEDC（教育開発学会）では、中国、東南アジア、アフリカ、中近東、東欧の研究者たちと討議する機会を得た。参加者はバングラデシュ、イラク、カタール、南アフリカ、モリシャス、ザンビア、ナイジェリア、チェコなど、筆者が今までに交流したことがない国や地域からの研究者たちが大半であり、その多くが英語を母語としない人たちであった。お互いの背景文化などを十分に理解していない者同士が第2言語で話すため、相手に理解してもらうには順を追って、様々な表現を用いて、論理的に話す必要がある。彼らはそれをよく理解しているのか、母語訛りが強い英語であるが、豊かな語彙・表現で、流暢に堂々と話していた。日本の英語の授業では、不適切な表現や論理性のない話し方をしても、相手の（主にネイティブ・スピーカー教員の）寛大な理解に甘えて、コミュニケーションが成立した気になっていることが多いが、それはここでは成り立たないことを実感した。

4. 考察

4.1 グローバル人材に必要な英語力

英語圏・非英語圏で英語がどのように使われているのか、また、国内外の大学で英語がどのように指導されているのかを視察し、今までの自分の理解が

現実に即していなかった点に気づいた。

(1) 国際共通語としての英語力

国際共通語としての英語 (EIL) は、香港、中国、タイで出会った非英語母語話者 (ノンネイティブ・スピーカー) や、国際大学で学習するアジアの学生たちと数日間交流を続ける中で、その実態を初めて体験したと感じた。彼らの英語は、決してネイティブ・スピーカーのようではないが、言語レベルは非常に高いものであった。小宮らが述べるように、国際共通語としての英語学習の目的は、ネイティブ・スピーカーのようになることではなく、Intelligible English (明確に理解できる英語) の習得であること²⁶⁾を身をもって体験した。

そして、MacKay が主張する “An appropriate EIL pedagogy is one that ... teaches English in a manner that respects the local culture of learning”²⁷⁾

(国際共通語としての英語教育は、その地域の学習文化を尊重した方法で行うのが適切である) の真の意味を理解した。すなわち、鳥飼²⁸⁾が述べるように、私たち日本人は英米文化を表面的に模倣する必要はなく、大袈裟なジェスチャやファーストネームを無理して使ったりする必要はない。ネイティブ・スピーカーのような発音や表現力を身につけようとする必要もなく、むしろ、意識して英米の文化的要素を軽くしていくことを念頭に置きながら、国際語としての英語を教えればよいのだ、と深く理解し、今までの迷いから解放された思いがした。

世界の英語話者はノンネイティブ・スピーカーの数が圧倒的にネイティブ・スピーカーを上回り、英語は英米人のものではなく、英米人の英語を目標とする必要はなくなった、という事実を、英語教員のみならず、学生も、他の教科の教員も理解し、自分たちの英語を気楽に使う環境を作る必要があると強く思う。「教員も自分の英語に自信がないのである…外国語を話すときに自信を持って使える人など少ないのである。重要なのは積極的にその言語を使う態度なのである」²⁹⁾ という塩沢の言葉を皆で共有すべきであろう。

国際共通語としての英語を十分に理解しているつもりであっても、実際にそのモデルとなる人々と直接に、深く関わる経験がなければ、日々の英語の指導において、Intelligible English を第一とすることを忘れてしまうことにも気づかされた。

(2) 思考して書く力

アメリカの移民の英語教育や香港での教育において、また国内の国際教養系大学においても、「思考して書く」ことが学習目標とされており、グローバル社会では、英語による論理的な作文能力が絶対的に必要であることを理解した。論理的に説明する文章が作成できなければ、世界の異なる歴史・文化・生活環境を持つ人々に自分の意図することを正確に理解してもらうことはできない。そして、文章できちんと書けなければ、明確に話すこともできないの

である。

グローバル人材に求められる口頭発表能力とは、日常会話能力ではなく、論理的に口頭で説明できる能力なのである。そして口頭発表の基礎となるのは、思考して書く能力なのだ。以前、筆者が所属する情報通信学部の英語プログラムについて、他大学の教員から「口頭発表の科目が先で、その後に文書作成の科目を設置するのはおかしいのではないか。逆であるべきだ。」と指摘されたことがあった。しかし、当時は、学部の高い目標にもかかわらず、ごく簡単なことも英語で表現できない学生を前に、軽い会話や表面的なスピーチだけでも何とか習得させたいと焦り、十分に指導の意味を考えなかったと反省する。吉田が述べるように、「海外へ行けば買い物などはできるようになり自然と身につく。しかし、論理的にもの考えて、思考して、議論するというのは、学校でしかできない」のである³⁰⁾ ことを世界を視察して理解した。学校で日常会話を「指導」するために多大な時間を割くことはないことを確信した。

4.2 何から改善するべきか

上記の 2 点を念頭に置き、グローバル人材に必要な英語力を指導するために、今までの指導をどう改めるべきかを考えてみる。

国内で英語教育に成功している ICU や AIU では、①一定レベル以上の英語基礎力を持つ学生が、②先進的指導法を実践できる教員の指導の下で、③毎日 3 時間以上の授業を受ける、という環境がある。しかし、一般の大学では、必修英語は週 2 回程度 (受講時間は週 3 時間程度) であり、理工系学部ではそれ以上の時間を英語に充てる事はほぼ不可能と思われる。そこで、意識の転換と、指導内容の変更によって対応することを考えてみる。

(1) 意識の転換

まず教員が、次の意識転換する必要があると思われる。①指導の目標は、英米人の英語に近づくことではなく、世界共通語としての Intelligible English (明確に理解できる英語) であること。②英語ネイティブ・スピーカーであっても、日本の文化を理解した上で指導できねばならないこと。

①に関しては、ノンネイティブ・スピーカーの外国人との交流を増やす必要がある。そのために、ノンネイティブ・スピーカーの教員を採用し、教員が日常的に英米語以外の英語に触れるチャンスを作ることから始めることができる。②については、外国人教員に日本の文化や思想を学習してもらい、日本人の学習スタイルや文章表現法を客観的に理解してもらうことで、適切に効果的に指導ができると思われる。

また、学生には、世界共通語としての英語の意義を理解させ、①英米人を真似る必要がないこと、②世界の人々は “English is money” という危機感を持って学習していること、を認識させる必要がある。

(2) 指導の改善

指導について、次の3点の改善を提案する。

① 日常会話に特化した「リスニング・スピーキング」の科目は設置せず、「読み書き」を学習する中で付随的に日常会話を習得させる。つまり、日々の教員とのやり取りや、学生同士の話し合いの中で英語を使う割合を徐々に増やししながら、日常会話の基本を習得させ、Intelligible English を自然な形で経験させる。また、「読み書き」学習の結果として、じっくり考えて書いた文章の口頭発表をさせることで、表面的に英米人を真似することは無意味であることを当然のこととして理解させる。

② 専門分野への橋渡しとして実施してきた数学やITの表現などの学習よりも、しっかり読み書きさせる学習を優先させる。思考して理解する能力と、論理的に発信する能力が備わっていれば、将来必要な表現などは、必要に応じて学ぶことができると思われるからである。まずは書くための基本となる文法を段階的に習得させ、その知識を応用して独自の英文を作成させ、さらに論理的な文章の作成をめざす。どの指導段階においても、しっかり思考させてアウトプットさせる必要がある。模倣により表面的にできたように見せる活動は不要である。

③ 論理を重視するグローバル・コミュニケーションについて、知識として学ぶ科目を、英語とは別の科目として開講する。その科目では、言語構造の違いや、日本の独特なコミュニケーション方法を客観的に理解させ、日本で常識とされることには、グローバル社会で理解されない点があることを教える。そうすることにより、英語の授業では、「英文で書く」訓練に集中でき、学生が感じる「なぜ？」の質問（なぜ説明しなければならないのか、なぜ理由を毎回述べねばならないのか、など）に時間を費やす必要がなくなる。

さらにもうひとつ、大学教育全般に関わる提案をしたい。グローバル人材育成が切迫した現在の状況を考えて、市村³¹⁾が提案するように、基礎学力と海外志向が高い学生には、特別プログラムによる「エリート教育」を行うことも視野に入れる必要があるのではないだろうか。モデルとなる人材をいち早く育てることで、後に続く学生の意識も変わるであろう。立命館大学情報理工学部のように、高い目標をめざして学習する意欲と基礎学力がある学生に対し、大学4年間を通して特別な学習のチャンスを与える仕組みを作ることが効果的なのではないかと思う。特に、グローバル人材をめざす能力がある3-4年次の学生に英語を使わせる教育プログラムを、英語教員と専門分野の教員とが協力して構築することができれば、自信を持ってグローバル人材を世に送り出すことができる。そしてそれが、学部全体の活性化にもつながると考える。

5. 今後の指導に向けての試行

教育改革は組織全体で考える必要があり、計画から実行まで時間がかかる。まずは、できることから試験的にやってみるべきだと考え、2014年度春セメスタから、筆者が担当するクラスで以下の試みをしている。

5.1 海外の学生とeメール交流

世界共通語として英語を積極的に使わせることをめざして、1年生の上位クラスの学生約30名に、海外の学生とeメールでの交流をさせた。セメスタ前半は日本語を学習中のアメリカの学生と、セメスタ後半は中国の学生とのeメール交換である。

アメリカの学生は日本語を学習しているので、こちらからの英文メールに対して教員経由で日本語の返事を書いてくれた。自分の英語が通じるかどうか不安な気持ちで書いた日本の学生は、アメリカの学生がほんの1-2年の学習で日本語メールが書けるほどに上達することを知り、刺激されたようであった。

中国の学生とのeメール交換は学生同士で直接に（教員にはCCさせて）自由に行わせた。お互いにノンネイティブ・スピーカーとして英語を使って交流することで、世界共通語としての英語を体験させることが目的である。話が盛り上がったペアは、1か月強の間に10回近くものメール交換を行ったが、返事がなかなか来ない学生もいて、不公平感が残った。

4月と7月に実施した学生アンケート（有効回答数28）の結果は次の通りであった。「英語でeメールを書くのは難しいですか」との問いに、「難しい」と答えた学生は、4月は86%であったが7月には68%に減った（Fig.1）。やってみたらそんなに難しくないと感じたようで、一応の効果はあったと思われる。

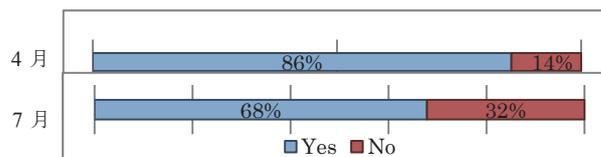


Fig.1 Is it difficult to write email in English?

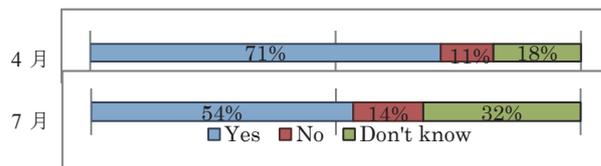


Fig.2 Do you want to continue email exchanges?

しかし、「英語でのeメール交換を外国の学生と今後も続けたいですか」という問いに対しては、「続けたい」という答えが4月の71%から、7月には54%に減ってしまった。代わりに「わからない」が18%から32%に増え（Fig.2）、一生懸命書いたのに返事が来なくてがっかりしてしまった学生や、eメールを

出すことの目的が明確でないため意欲を失くした学生がいたことなどがわかった。今後どのような方法で実施すれば有意義な交流ができるか、相手側の教員との綿密な事前準備が必要であることがわかった。

5.2 海外の学生とスカイプで対話

3-4年生の有志4名がタイのチェンマイ大学工学部の学生とスカイプで交流を行った。3-4年生は必修英語がないので、課外活動として有志を募り実施した。毎回30分～1時間ほどお互いの日常生活について質問し合い、徐々に親しくなり、自宅から個別に交流する学生も出るほどになった。しかし、5回目から教員が立ち会えず、自主運営をさせたところ、話す内容が発展しなくなり、興味が薄れてきてしまった。興味があるテーマを選んで準備するようにアドバイスしても、課外活動であるためか、真剣にならず、内容が深まらず、徐々に参加者が減り、またタイの大学が夏休みに入ったこともあり、自然消滅してしまった。英語で意思疎通する能力があり、海外交流に意欲的な学生でも、会ったことがない外国の学生と、どのような内容をどのような方法で話したらよいかのわからないようで、教員の指導なしで実施することは難しいことが判明した。

その後、アメリカのフロリダの学生から交流のオファーがあり、1年生の有志3名が行うことになった。タイとの交流での苦い経験を反省し、今回は事前に何度も集まって、何について話すか、なぜそのことについて話すか、自分の意見は何か、それを明確に伝えるには何を述べる必要があるか、相手にどの点を尋ねたいか、など、教員との対話を通して、論理的に考えさせ、さらにそれに必要な言語的準備（語彙や言い回し）をさせた。準備には、実際の対話の3倍以上の時間を費やさねばならず、論理的に考えさせる指導がいかに難しいかを初めて体験した思いであった。今後、英語の言語力のある程度習得している学生に、論理的な表現を指導する場合、指導法の研究と教材の入念な準備が必要であることがわかった。

5.3 思考させて書く学習

あるテーマについての文章を読み、語彙や表現を学習させたのち、同じテーマの別の英文を読み、その内容をわかりやすいことばで表現しなおす（パラフレーズ）活動を行った。学生は、読解した英文から重要な部分を抜き出すことは容易にできるが、それを自分の表現で分かりやすく述べる作業は全く慣れていない。1年生と2年生の上位のクラスで数回試みたが、まだうまく指導できておらず、学生に大きな上達は見られない。しかし、昨今の剽窃問題を考慮すると、グローバル人材をめざす学生には学ばせねばならない必須事項であると考え、どのような方法で、段階的に指導したらよいか、今後の研究が大いに必要となる。

5.4 「読み書き」学習に「話す」練習を導入

現在開講されている「リーディング&ライティング」の授業では、読んだ内容について理解を深めるためにグループで話し合いをさせているが、その際に英語で話す量を徐々に増やすことを試みた。毎回の話し合いの前に、必要な表現を提示し、使い方を練習させてからディスカッションさせた。質問の仕方や賛成・反対意見に理由を付けて述べることなどを少しずつ導入し、議長役の学生には、話し合いの始め方、発言の促し方、他の意見を求める表現などを考えさせ、練習させ、実際に使わせた。徐々に英語を使える場面が増える様子が見られたため、今後必要な表現などを整理して教材としてまとめれば、学部全体として「読み書き」の授業の中で日常会話を習得させることが不可能ではないと思われる。

また、2-3のテーマについての「読み書き」学習が終わったところで、関連したWeb上の短い動画を英語字幕付きで見て、その内容をパラフレーズし、文章にまとめ、口頭発表する活動を行った。字幕を追いながら聞こえた内容を自分のことばで書き直して発表することで、「読み書き」学習と「聞く話す」学習を連携させることができた。学生は非常に意欲的に取り組んだため、今後、さらに効果的な指導法を研究し、よい方向へ進めたい。

5.5 「現代文明論」での講義

2012年より、1年次の必修科目「現代文明論I」の授業の1回を使って、グローバル社会で論理的に述べることの重要性、言語構造の違い、その背景にある文化・歴史の違いなどについて講義をしている。講義直後のレポートでは「グローバル社会では論理が大事であることがわかった」「こんなに日本語が曖昧な言語だとは思ってもみなかった」などのフィードバックが多くあった³²⁾が、たった1回の講義でどれほど定着するかには疑問が残る。その後の英語科目での書く学習につながっているとも感じられない。今後どう定着させるか、検討を要する。

6. まとめ

本稿では、東海大学情報通信学部でグローバル人材を育成するために英語教育をどのように改善すべきか、という難問の解決糸口を見つけるために、国内外を視察して得た知見を述べ、今後の指導にどう生かせるかを検討した。

日本人が長い間持っていた「本家本元はやはりイギリス英語やアメリカ英語であるからそれを基に教えるべきである」という認識³³⁾を教員も学生も改め、世界には多様な英語が存在し用いられていることを認識する必要があることと、論理的に書く学習なしには真のグローバル人材としての英語力は育たないことを述べ、指導の改善を提案した。

今後どのような教育プログラムを構築するかは、

試行中の活動の結果を分析し、英語教員と専門分野の教員とで議論しながら改善しく必要があるであろう。長期的な視野で指導計画を進めたいと思う。

謝辞

2013年度後期に、特別研究休暇をいただき、このように有意義な研究をさせていただいた。東海大学学長、情報通信学部学部長、その他多くの大学関係者に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 文部科学省「英語が使える日本人」の育成のための行動計画, 2003
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryu/04031601/005.pdf
- 2) 市村泰男：グローバル人材育成と学校教育限座での取り組み, 英語展望 No.120, pp42-49, 2013
- 3) The JACET 52nd International Convention Book, pp23-28, 2013
- 4) 東海大学：情報通信学部の教育方針と教育目標, 授業要覧2008 情報通信学部, p9, 2008
- 5) 岡田礼子, 中山千佐子：情報通信学部の英語教育プログラム—理念と初年度前期の実践—, 東海大学情報通信学部紀要Vol.1, No.2, pp1-6, 2009
- 6) 岡田礼子, 中山千佐子, Jay Veenstra：初年次教育での学習習慣と意欲の喚起—教員連携と学生の自主管理に向けて—, 初年次教育学会誌 第2巻, 第1号, pp64-71, 2009
- 7) 岡田礼子他：公平かつ意欲を高める定期試験—情報通信学部必修英語科目における試み—, 東海大学紀要 教育研究所 No.18, pp1-13, 2010
- 8) 岡田礼子, 中山千佐子：情報通信学部のESPを目指す一般英語科目—第1期生2年間の報告—, 東海大学情報通信学部紀要 Vol.3, No.2, 2010
- 9) 岡田礼子：「プレゼンテーション演習II」2年目の取り組み—文法指導から考えて作成させる英文発表へ—, 東海大学情報通信学部紀要, Vol.4, No.1, 2011
- 10) Illinois Coalition for Immigrant and Refugee Rights,
<http://icirr.org/sites/default/files/fact%20sheet-demography%202011.pdf>
- 11) Migration Policy Institute, State Immigration Data Profiles, 2012
<http://www.migrationpolicy.org/programs/data-hub/state-immigration-data-profiles>
- 12) Theresa Harrington, More educational services needed for California immigrants and English learners, Contra Costa Times, 2014
http://www.contracostatimes.com/california/ci_25989551/more-educational-services-needed-immigrants-and-english-learners
- 13) 小池生夫：「企業が求める英語力調査報告書—第二言語習得研究を基盤とする小, 中, 高, 大の連携を図る英語教育の先導的基礎研究」明海大学外国語学部, 2008
- 14) Gevek Anbarchian, “Using Painting to Teach Critical Thinking and Academic Writing” ITBE Fall workshop, October 26, 2013
http://www.itbe.org/docs/ITBE_FALL_WORKSHOP.2013_Draft5.pdf
- 15) Franzen, Paul & Bray, Brittany, “Stepping Stone to Mastery” : Teaching Language in Context, ICTFL Fall Conference, October 17, 2013
- 16) CNN, ” The World Greatest City: 50 reasons why Hong Kong is No.1
<http://travel.cnn.com/hong-kong/none/worlds-greatest-city-hong-kong-576599>
- 17) Lisa Lim, “English as a global language in Asian contexts” Lecture given at Hong Kong University on November 13, 2013
<http://www.english.hku.hk/courses/ccgl9038.htm>
- 18) ICU：2014入学案内, p.35
- 19) ICU：ホームページ, 交換留学・海外留学・夏期留学プログラム
<http://www.icu.ac.jp/academics/global/ieep.html>
- 20) 陣内悠介：若き経済学者—南魚沼, 2014
<http://youngecon.com/iuj-student-body/>
- 21) 会津大学ガイドブック 2014, p.4, p7
- 22) 立命館大学情報理工学部：グローバルIT人材育成リーディングプログラム「みらい塾」
<http://www.ritsumeit.ac.jp/ise/mirai/index.html/>
- 23) 尾関直子：中国の英語教育から見えてくるもの, 英語教育Vol.54 No.12, pp23-25, 大修館, 2006
- 24) Wang Haixiao, A Paradigm Shift for English Language Teaching in Asia: From Imposition to Accommodation, The Journal of Aisa TEFL Vol.8, No.4, pp205-232, 2011
- 25) MacKay, S.L. *Teaching English as an International Language: Rethinking Goals and Approaches*, Oxford University Press, 2002
- 26) 小宮他：国際英語論の観点から見た日本人の英語, JACET中部25周年記念論文集, pp31-56, 2008
- 27) MacKay, S.L. “English as an International Language” N.H.Hornberger & S.L.Mackay (Eds.), *Sociolinguistics and Language Education*, pp89-115, Multilingual Matters, 2010
- 28) 鳥飼玖美子：「地球語としての英語」をどう考えるか—学校教育の目的と役割—, 英語展望 No.118, pp16-23, 2010
- 29) 塩沢正：「国際英語論」の視点から英語を学ぶ意義, 中部大学人文学部研究論集 22, 63-91, 2009
- 30) 吉田研作：確かなコミュニケーション能力を育成する英語教育のあるべき姿, 2013英語展望 No.120, pp2-9, 2013
- 31) 市村康男：グローバル人材育成に果たす英語教育の役割, ELEC英語教育シンポジウムにて, (財)英語教育協議会, 2012年11月10日
- 32) 岡田礼子・福崎稔：グローバル人材育成のための現代文明論と英語科目の連携, 東海大学教育研究所 研究資料集 第20号, pp41-51, 2012
- 33) 塩沢正：「国際英語論」の視点から英語を学ぶ意義, 中部大学人文学部研究論集 22, 63-91, 2009